



想い | つくる | 伝える



[F u u d]
2020
冬号
—季刊—

ちんこ
ろ物語

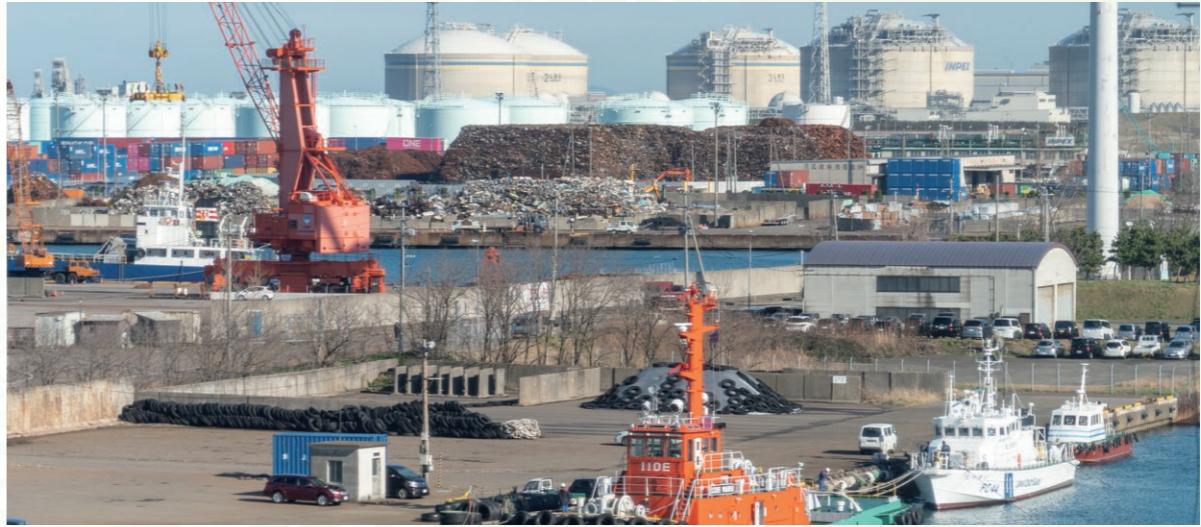
郷土玩具でも、お菓子でもない、雪国十日町のお正月のお飾りにかかせない「ちんころ」。体長3cm前後。米の粉の細工人形で、福をもたらす犬やめでたい鯛や米俵などを組みあわせた四つの基本パターンの他、十二支や花もある。毎年1月に4回立つ節季市の人気モノ。(1月15日節季市 十日町市諏訪町)

がんばろう ● ニッポン!

まち、ひと、暮らしの発展のために

[上越市] 文 / 本望典子

にいがたの水辺 vol.4



以前のダムカードに続き、今回は初の港カードを入手した。新潟県内で配布される8種類の港カードをコンプリートした人は港関連のノベルティを…と思わずそんな企画を提案したくなるのは職業病というやつだろう。

しかし、港が自分たちの暮らしにどのように役立っているかを普段考えるのはそういないのではないか。私はずいぶん昔、新潟県港湾課に非常勤職員として4年間勤務していたが、難務をこなすだけで港湾の重要性について調べたことは一度もなかった。

今回の取材で直江津港のコンテナ輸送現場を特別に見せていただき、そのスケールの大きさに驚愕した。高さ約60mのコンテナクレーンの稼働、世界各国のカラフルなコンテナが次々に運び込まれてくる様は圧巻だった。取扱量は、年間約3万TEU(1TEU=20フィートコンテナ1個分)だそう。上越や妙高など地元企業の製品である化学薬品の輸出や工場で使用する原材料の輸入など、案外身近なもののが取扱もあり、港が欠かせない存在であることを実感させられた。



またLNG(液化天然ガス)火力発電所やLNG基地の稼働により、広く県内外に天然ガスが供給され、私たちの暮らしに役立てられている。

モノの流れはもちろんだが、人の交流にも一役買っていて、直江津港フェリー航路では、佐渡との間に旅客の行き来がある。平成27年には船も新しくなり、高速船「あかね」が就航。平成28年には、荒浜ふ頭第3防波堤が釣り場として開放されるなど、県内外の釣り人にも人気のスポットとなった(現在は冬季閉鎖中)。

港はまさに人やモノの玄関である。
「日本と世界を結ぶ直江津港」は、新時代にふさわしい港湾として今後ますます発展していくことだろう。

直江津港に足を運ぶ際は、平成30年にリニューアルした上越市立水族博物館「うみがたり」とあわせて、上越の海の美しさ、街の素晴らしさを感じていただきたい。



直江津港

概要 / 日本海沿岸の中央部にあり、奈良時代から越後国府の要港として栄えてきた。昭和26年、港湾法の重要港湾に指定。平成23年、液化天然ガス部門の日本海側拠点港に新潟港とともに選定。定期コンテナ航路は、国際物流の拠点・釜山港と連携し、地域の発展とともに世界への安定した物流ネットワークを構築している。

ふうど 2020冬号 vol.47

企画編集 ふうど編集室
発行人 高橋 佑
取材編集 渋川綾子
佐々木聰
写 真 渡部佳則
デザイン 斎藤道司
題 字 小林 翠

編集後記

平野部で生活しているものには、山間部で雪に埋もれて暮らす人びとの心情を理解するのは難しい。しかしちんころが、それを正確に教えていた。ちんころ文化が息づく十日町市は国内有数の豪雪地。合併前の市域は、信濃川中流域の両岸に広がり、大昔に縄文人が暮らしていたエリアでもある。雪がもたらす風土を背景に1500年もの歴史を誇る織物産業のほか、雪祭り、大地の芸術祭など個性的な地域資源が多い。ちんころも、そのひとつ。雪に倦んだ時期に開かれる節季市は、心が浮き立つもので、ちんころは晴れやかな楽しさを象徴し、縁起物としての性格も負っていた。ひび割れが多いほど、縁起が良いという。米粉で作られたちんころは、時間が経てばヒビが入る。その自然現象を幸運の証と意味づけた昔の人の思いつきに、重苦しい冬をともに過ごす庶民同士の励まし合いと慈しみが隠されていた。指先の芸術品ともいえる、ちんころ。その匠の源流は、十日町の大地に生き、国宝に指定された火焰型土器を創った雪国縄文人の美学にあると思いたい。(渋川)

発行所

ふうど 編集室 まちこころの
株式会社タカヨシ

■本社・工場 / 〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800
■東京支社 / 〒113-0034 東京都文京区湯島二丁目24-11 湯島北東ビル2階 TEL (03) 3837-4488 FAX (03) 3837-4884
■仙台営業所 / 〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉5丁目347上杉オカウデビル501号室 TEL (022) 266-1711 FAX (022) 266-1712
■名古屋営業所 / 〒465-0093 愛知県名古屋市名東区一社1丁目79 第六名昭ビル6A TEL (052) 753-8080 FAX (052) 753-8081
■オフィシャルサイト / <http://www.takayoshi.co.jp>

「ふうど」はここに置いてあります

【新潟市】中央区>ANAクラウンプラザホテル新潟、駅前オフィスNII GATA、NSG学びステーション、NST、NPO法人 Made in 越後、上古町商店街、旧小瀬家住宅、県立自然科學館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中屋本店など工房、朱鷺メッセ、新潟NPO協会、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県政記念館、新潟県民会館、新潟県立図書館、新潟国際情報大学、新潟中央キャンパス、新潟市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ピアBandai、ホテルイタリア軒、ホテル日航新潟、ピューフ島潟、新潟空港、鴻川公民館、<江南区>介護老人保健施設亀田園、新潟市立亀田図書館、<西蒲区>カーブド・ドーム・シティ、秋葉区>カフェギヤラリーやまぼうし、川内自動車、新津鉄道資料館【新潟市】加治地区公民館、紫雲寺地区公民館、新發田市生涯学習センター、新發田市市民文化会館、新發田市立図書館、豊浦地区公民館、【聖籠町】聖籠観音の湯 ざぶーん【村上市】イヨボヤ会館、村上市観光協会【長岡市】新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物館、長岡大学、長岡市立中央図書館、長岡西病院、やまこじ復興交流館おたらる【燕市】分水ビターサービスセンター【出雲崎町】越後出雲崎天領の里、【湯沢町】曾国觀光舎 越後湯澤温泉【南魚沼市】桜宛【佐渡市】SADO伝統文化・環境芸能の専門学校、ホテル大佐渡【東京都】
【渋谷区】表参道・新潟館ネスバズ、<中央区>ブリッジにいがた、<千代田区>新潟市東京事務所【東京都】
本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。

エコプレス
バイインダー

この印刷物は環境にやさしい
製本方法を採用し、
リサイクルや怪我の危険へ
配慮しています。



あたりいちめん白く染まる雪国の風景に、赤、黄、緑の強い色をあしらつた「ちんころ」がよく映える。

「ちんころ」は米を挽いた粉で、子犬やうさぎなどを作った縁起物。

毎年一月に開かれる十日町市の節季市で売られている。長い間、雪国の人びとに寄り添い、心を温めてきた。

戦後の一時期は途絶えたものの、明治期から現在まで形はシンプルだが、土偶や埴輪と同質の生命力を放つ「ちんころ」。

その魅力をあらためて探つてみた。

みんなが 恋におちる日

想い カワイイパワー全開

節季市の風景

①うわ～っカワイイ！使い込んだへぎのなかで買い主を待つ、表情豊かなちんころたち。
すべて一般市民の手によるもの。ちんころは、作った人の顔に似るという。
②あれがいいか、これにしようか。誰の顔にも笑みがこぼれていた。

一月十五日、ちんころを買ひに初めて十日町市の節季市に行つた。主要道路は除雪されいたが、町の背後に広がる空き地は一メートルをゆうに越える雪に埋もれていた。めざす節季市はメインストリートから諏訪神社に向かう小路に開かれていた。縁日気分を煽る露店、路上に



明をあげて必死に無事を祈り、少女も事の重大さにおののいた。幸いに父親は雪崩を免れた。ただ、お土産のスゲボシや付け木など荷物を全部捨て、身ひとつで命からがら帰ってきたという。

節季市とちんころの関係性が、よくわかる思い出である。一月十日、十五日、二十日、二十五日に開かれる節季市は、正月が旧暦で行われた頃は、一月が年末にあたり、市は正月や長い冬を越すために必要な品々を調達するため、大勢の人で賑わつた。出店者の多くは近在の農家の人たち。それぞの家が手仕事で作つた竹細工や藁製品の他、自家製の野菜などが並べられた。販売する品は地域により特徴があつたため、互いに品物の交換ができ、町の人びとも便利だった。また出店した人は、市で得たお金で正月のように新年に欠かせない縁起のいい正月飾りとして、また帰りを待ちわびる子どもたちを喜ばせたいという親心も手伝い、ちんころは市の人気者になり、別名「ちんころ市」と呼ばれている。年に一度しか手に入らない希少性も、魅力のひとつだつた。

③ちんころの代表的なモチーフ「いぬ毬」。白と差し色のバランスが絶妙。

④地元では家の要所要所に飾るため10匹は買うそうだ。意外に年配の男性客が多くつた。

⑤ちんころを買ひ求める人の列。販売開始まで、小1時間もあるのに。左側は昔ながらの竹かごやザルを売る店。

シートを敷いただけの竹細工の店、こじんまりと自家製の野菜や山菜の漬け物を並べる店などがのんびり開店の準備をしていだけ行列ができていた。販売開始まで、まだ小一時間もあるのに、ちんころの人気ぶりに驚く。近年、ちんころを買ひ求める光客が増え、午前中に売り切れ間から並ぶのである。行列の最後尾につく。店先に置かれた箱の中に、たくさんのが並んでいた。ちんころの前に立つ。腰をかがめ、ひとつひとつ子犬と目を合わせ、我を忘れて魅入つてしまつた。どれも可愛く選びきれなかつたが、背後で待つ人の気配を感じ、何とか数個を買ひ求めた。まさに一期一会。緊張感あふれる数分だった。

ちんころを無事に入手した後、ゆっくり市をめぐる。ちんころを売る店先では、どこも長蛇の列が途切れず、買う順番の訪問から並ぶのである。行列の最後尾につく。店先に並ぶのである。ちんころを前に真剣に見定める姿があった。誰もが愛おしいもの

を見つめるところけるような目をし、ひとときの幸せに酔いしつけた。

その昔、町から遠く離れた村に木挽き大工の父親をもつ少女が暮らしていた。二、三メートルもの雪に閉ざされる冬場。外まです！」の声に胸が高鳴る。やつと、ちんころに真正面から向き合える時が来る。それでも行列は遅々として進まず、なかなか買う順番がめぐつてこない。そして、ようやくのことで、ちんころの前に立つ。腰をかがめ、ひとつひとつ子犬と目を合わせ、我を忘れて魅入つてしまつた。どれも可愛く選びきれなかつたが、背後で待つ人の気配を感じ、何とか数個を買ひ求めた。まさに一期一会。緊張感あふれる数分だった。

ちんころを前に真剣に見定める姿があった。誰もが愛おしいもの

家で待つ人を思う

十日町市博物館発行の『雪国十日町の暮らしと民具』にある女性の節季市の思い出が収録されている。

その昔、町から遠く離れた村に木挽き大工の父親をもつ少女が暮らしていた。二、三メートルもの雪に閉ざされる冬場。外仕事ができない父親は節季市で売るために、木工の腕を活かし、まな板や鍋蓋、炬燵板を作つた。そして市になると、それらを背負い、夜も明けない暗いうちに家を出て、市の立つ町まで雪道を歩いて行った。そして帰りには子供用のスゲボシ（スゲコロをお土産に買つてきてくれた。少女は、ちんころが大好き。最初は真っ白だったちんころで編んだ雪よけの帽子）とちんころをお土産に買つてきてくれた。少女は、ちんころが大好き。最初は黒っぽくなるまで、一緒に遊んだ。そして最後は囲炉裏で焼いて食べるのが冬の楽しみだった。ある戦時中の大雪が降つた日、節季市に行つた父親が、暗くなつても帰つて来なかつた。村に入る道で雪崩が起きてしまつた。母親は神棚に燈を探しまわつた。母親は神棚に燈

百年前のかわい

ちんころ文化の再発見

できあがっていた。

ばあちゃんの言いつけ

ちんころ市の出店者のひとり田斎忍さんに、その作り方などを伺う。

田斎さんは明治の終わり頃に、ちんころを考案した関口仙蔵の子孫。仙蔵は田斎さんの曾祖父の、そのまた父にあたる。仙蔵のちんころは「仙之助」と呼ばれ、丁寧な手わざと独特的の作風に人気があった。

「わたしのちんころは、明治大正に作られていた昔ながらのものであります。昔の作り方は、隠れたところでも、とても手の込んだ工夫が施されています」。例えば、ちんころの代表的なモチーフへねこに鯛の場合、鯛の皮は赤だが、生地になる身の部分は白くしている。なぜなら実際の鯛は自身の魚だから。へねずみに俵も同じ。俵の表面は黄色にすら、中の米は白だから白い生地を使用する。その隠れワザで色の映え方に違いができるという。またひび割れをできるだけ遅らせるために、見えない部分を大きく窪ませている。

けど、毎年楽しみに待っている人がいるから、頑張れるという。もちろん、ばあちゃんの言葉も重い。

雪と三原色の対比

造型物としてのちんころの美は、何でしょうか。「除雪が行き届いていなかった昔は、段々になつた雪の山のところに、ちんころが並べて売られて

もつとも気を使うのは肌の白さと艶。節季市当日の天気まで想定し

て、色の濃さを調整するなど、細かい工夫を祖母から伝授された。「子

どもの頃、ばあちゃんと一緒に作った時のスタンダードな色、カタチ、表面の照り具合などは頭の中には残っています。でも伝統的なちんころを復活させたいと自分から進んで教えを請うた時からは、ほんとに厳しかったです。いちばん手間のかかる作り方や、花はもっとゴ

ジヤスにしろなど、細かいことを、あしろ、こうしろと指示され、そのまま通りにしないと容赦なく叱られます。いま思えば仙之助ちんころの奥義をパーコートに伝えたかったのでしょうか。いまは、ばあちゃん

ジヤスにしろなど、細かいことを、あしろ、こうしろと指示され、そのまま通りにしないと容赦なく叱られました。いま思えば仙之助ちんころの奥義をパーコートに伝えたかったのでしょうね。いまは、ばあちゃんにやら言われたことだけは守ろうと思っています」。ばあちゃんとは、仙蔵の内孫、仙蔵の技術とちんころに込める想いをしっかりと受け継いだ関口光江さんである。光江さんは一時期家業の都合でちんころから離れたが、昭和五十年代後半、十日町で途絶えてしまつたちんころを姉妹と一緒に復活させ、その技術を広める活動にも尽力した。



粉状にしたコシヒカリに熱湯を入れて練り、ひと晩寝かしておいた生地を身体全体で練りあげ、柔らかくする。生地の色は食紅でつける。



練りと手のぬくもりで柔らかくなった生地の塊から、(いぬ毬)の毬の部分を絞りだす。その手つきは手慣れたもの。



やや丸くなつた白い毬に、三色の色を足し、掌の上でくるくると丸める。



正円になった毬をボール紙の台紙にのせ、親指でギュッと一気に押し、ひび割れ防止のための窪みをつくり、そのまま押し付けて台紙に接着させる。



子犬の身体を別に作る。粘土細工のように、丸めながら頭と胴のくびれを作る。



足になる部分に握りハサミで切れ込みを入れる。



人さし指の先だけで前脚と後ろ脚の表情をつける。



子犬と毬を合体させた後、それを左の掌に乗せたまま、左指で目をつくり、顔につけた。目は直径1mmほど。指先の動きだけで行う超絶な早ワザだった。



いました。真っ白のところに、赤・黄・緑の原色が映えて、とてもきれいだつたと思います。この三色は魔除けの色で、福を呼ぶ縁起物としての意味もあります。初代の仙蔵は信仰心の篤い人でしたから、福を招く色遣いを思いついたのだと思います。ちなみに仙蔵がちんころを始めた発端は、知り合いの杜氏とうじが酒米の蒸し具合を確認するためのひねり餅を細工し、

馴染みの芸者さんに贈ったことからヒントを得た、と、関口家では言い伝えられています。仙蔵は飴屋をしていたので、いろいろな形を作る飴細工はお手のものだったんですね」。なるほど、田斎さんが実演してくれた時、握りハサミを使い、目にも止まらぬ速さで子犬ができあがった。その様子は子どもの頃、街で見た飴細工職人と同じ、匠のワザだった。

普通は熱くて手を入れられないのに、難なく生地を作ることができた。これは生まれ持つた才能で、ちんころ作りの全工程を一人でこなせる素地が小学校の時、すでに

ちんころ作りは、材料の仕込みから仕上げまで四日間かかる。節季市の期間は、寝ずの日がつづく。大変だ『ちんころを絶やすな』という言葉を遣し田斎さんに未来を託していく。田斎さんは、小学校高学年の時から、節季市の時期になると母親の実家である関口家に行き、ちんころを作りに加わった。それは親戚中の手動員させる室内工場のようだつた。「工作の粘土細工のように楽しめて、大人たちのやり方を見ようだつた」。中学時代に故郷を離れてみて、ちんころ足が遠のき、関心は薄れた。が、学生時代に故郷を離れてみて、ちんころの魅力と文化的価値に気づく。現代風のちんころが主流になっていく時代の風潮を、寂しそうに見つめる祖母の光江さんの姿も心に引ったかっていた。田斎さんは、他の従姉妹たちができない特技があった。熱湯を入れて粉を練りあげることができたのである。

『ちんころを絶やすな』という言葉を遣し田斎さんに未来を託していく。田斎さんは、小学校高学年の時から、節季市の時期になると母親の実家である関口家に行き、ちんころを作りに加わった。それは親戚中の手動員させる室内工場のようだつた。「工作の粘土細工のように楽しめて、大人たちのやり方を見ようだつた」。中学時代に故郷を離れてみて、ちんころ足が遠のき、関心は薄れた。が、学生時代に故郷を離れてみて、ちんころの魅力と文化的価値に気づく。現代風のちんころが主流になっていく時代の風潮を、寂しそうに見つめる祖母の光江さんの姿も心に引ったかっていた。田斎さんは、他の従姉妹たちができない特技があった。熱湯を入れて粉を練りあげることができたのである。

ちんころの作り方を実演してくれた田斎忍さん。こんなに若い人が伝統を守っていた。



三国山脈を越えたちんころ

伝える カワイイ突破力

ちんころ広報官

ちんころは、雪国十日町の暮らしと、たくさんの人びとの物語を小さな身体に秘め、現代に伝えている。その物語とともに、雪国独特の文化を伝承したいと願う人びとのグループが、ちんころ作りの技術を習得し、節季市でそれぞれの個性を競っている。これほど土着性の強いちんころ文化が、全国の歴史ファンからメツカ的存在と仰がれる国立歴史民俗博物館に展示されている。この博物館は、通称「歴博」とい、日本の歴史文化を現代的視点と世界的視野で研究する学術教育機関で、その成果を展示というタチで発信している。

さつそく千葉県佐倉市にある博物館に行つてみる。佐倉城址公園内に建つ重厚な建物のなかに、わざら雪国の文化が紹介されていると思うと胸がときめく。(歴史の流れを可視化できる展示)をコンセプトにした館内は、旧石器時代から高度成長期まで時代ごとに、ジオラマや精巧な模型を駆使した展

示が展開され、その時代に紛れ込んだような錯覚を覚えた。駆け足の見学だったが、小さな島国だと思っていた日本が、物語の分厚い地層を抱える大きな国だったことを体感した。こうしたダイナミックに変転する時代の傍流で営まれてきた庶民の生活を紹介する第4展示室の一画に、節季市が紹介されている。(くらしと技)ゾーンの「市と行商」のコーナーである。ガラスケースのなかに、たくさんのちんころが並べられ、渋めの展示品が多いなかでキッチュな色使いが目をひく。初めての土地で、新潟の郷土品に出会えて懐かしく、嬉しかった。それも、その道の研究者が推奨した展示となれば、誇らしい。展示の担当者によれば、二〇一三年に第4展示室をリニューアルした際に、祝祭性がある市として節季市を取りあげ、市の人気商品で縁起物のちんころを展示したという。またリニューアル時、地元十日町の出店者が一人になっていた竹細工もあわせて展示したそうだ。たとえレプリカであっても三国峠を越えて壮大な博物館にいるちんころたちは、元気に雪国十日町の心をアピールしていた。



国立歴史民俗博物館の第4展示室(民俗)の「くらしと技」のなかの「市と行商」コーナーに展示されていた、ちんころの複製。



節季市の紹介コーナーでは、昭和30年代の古い写真をデジタルディスプレイで見ることができます。



佐倉城址公園の北側にある博物館は、重厚な建物で、いかにも知の宝庫といふところだ。



明治後期に川崎巨泉によって描かれた「十日町団子細工」。基本となるモチーフは、現代のちんころと全く変わらない。
(大阪府立中之島図書館所蔵「人魚洞文庫」玩具帖より)

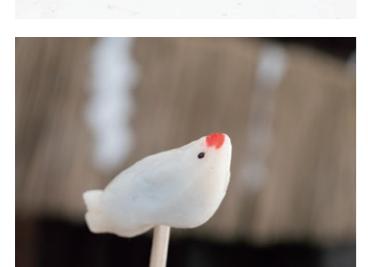
カワイイのチカラ

この『歴博』に、ちんころが展示されていると教えてくれたのは高橋由美子さん。十日町市博物館の学芸員で、普通に節季市やちんころに馴染み、有志と伝承会を作り、ちんころ作りの技術の伝承につとめている。「ちんころの起源については、いろいろな説がありますが、それらを裏付ける検証はこれからです。上越市のお菓子屋さんでは、季節限定でちんころを販売していますし、柏崎市や長岡市でも、しん粉で干支を作り障子のさんに飾ったという話も聞いています。山間部では十二講の行事で、しん粉で犬を作り神様にお供えするなどの民俗伝承があります。もともと粉食文化がある日本では、しん粉をこねて細工モノを作り、祈りの場に用いることは、特別なことではなかったと思います」。

では、どうして十日町だけが、ちんころ人気を保っているのか。「節季市が望まれ、それを継続する経済的基盤が町にあったから。節季市は、別名ちんころ市とも呼ばれるほど、ちんころは昔から人気でした。それでも一時は人気に翳りが出た時期もありました。でも、この全国規模の博物館で展示されてからなのか、人気が復活し、メディアなどで取りあげられる機会が増え広く知られるようになりました。実際にちんころを手にとつてみれば、その可愛らしさに共感してもらえます」。

さらに「日本人は、人形のなかに神性を見いだす感性をもつています。生物が休眠する静寂な雪のなかで、唯一ちんころが命を語りかけてくれ、それが長く単調な冬の日々に歡びをもたらします。大人でも、あの小さな目に見つめられれば何かを感じます。敏感な

ちんころには人間と人形の境界を溶かす不思議なチカラがあつた。人の手が生みだせる極限の小ささと、カワイイけど媚のない潔い美が、その力の源のように思える。この雪国で生まれた親しみのある造形美は、これからも人の心に愛の魔法をかけつけ、同時に深遠な雪景色が心を澄ませ美意識を育てることを教えてくれるだろう。



インフォメーション

国立歴史民俗博物館

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117
TEL ハローダイヤル 03-5777-8600
<https://www.rekihaku.ac.jp>

十日町市博物館

〒948-0072 十日町市西本町1-448-9
TEL 025-757-5531
(2020年6月新館オープン・現在は休館中)

読者の声 ~前号を読んで~

カールさんの生き方に感動

新潟にはカールさんのような人がいて働きがあることを知り、とても嬉しく感動しました。自分の知らないところにも、一人一人の生き方と考え、信念があります。さまざまなことを経験し、積み重なって、成し遂げられていくことを感じました。日本建築やドイツ、ロシアなどのモダンな建築が好きなのでカールさんの建築物と十日町を見に行きたいと思いました。

(新潟市 20代女性)

古町の町屋も再生されたらしいな

新潟の産業文化に関わる伝統をいつも掘り下げて特集してくださり、毎号新しい発見でいっぱいです。日本の山あいの集落に建つ古い建物がカール・ベンクスさんの手によって素敵に蘇り、後世に残っていることを嬉しく思いました。新潟市生まれの私は、古町などの町で空き家になっている古い家屋や町屋も、こんなふうに再生されて残っていくといいのになあ、といつも思っています。

(長岡市 20代女性)